



**新たな研究拠点が落成！**

**愛媛大学**

**紙産業イノベーションセンター**

この春、妻鳥町の愛媛県紙産業技術センターの隣に、愛媛大学紙産業イノベーションセンターの新しい研究拠点が落成しました。

愛媛大学と本市とのつながりが顕著となったのは、平成22年「大学院農学研究所・紙産業特別コース」を開校したのがきっかけです。

本市の産業界においては、昭和40年ごろから「これだけの産業集積があるのだから、工業系の教育機関があってもいいのでは」という声があったそうです。ところが、市内にはそのような教育機関が一つもないというのが実情でした。

そのような状況下、愛媛大学が県の代表的な地場産業である紙産業に着目し、その振興を図ることで地域に貢献しようと呼び出したことで、半世紀にわたる地元の悲願がついに実現したのであります。

開校後も、地元密着で活動してきた愛媛大学の紙産業コースは着実に評価を高め、それに後押しされる形で平成26年にはイノベーションセンター、平成28年には社会共創学部・産業イノベーション学科（紙産業コース）が設置され、大学院・学部・研究センターが、開校から10年を待たずして出そろったこととなりました。これで、紙の産業集積にとって、唯一欠けていた最後のピースが埋まったのです。

そして、学部生が3年生となり、学びの拠点を松山市から紙産業が集積する本市へと移すタイミングに合わせて、新しい拠点がこのたび整備されたものです。なお、今年度は学部生7人と大学院生6人がここので学んでいます。

建物の概要は、鉄骨造2階建て・建築面積361平方メートル・延べ床面積691平方メートルで、建設用地は県が無償貸与し、建設費用の一部には紙関連企業からの寄附金や市の補助金が充てられています。主な機能は、教員室6部屋、事務室、会議室3部屋、学生控室2部屋、共同研究室4部屋、ミーティングスペースなどです。

この施設の完成により、愛媛大学・紙産業コースの取り組みはますます充実し、研究開発や産業人材の供給という形で、これまでも増して本市産業界での成果が期待できそうです。

いま我が国では、地方創生の必要性が叫ばれていますが、本市には、それを乗り切るための新しい力が加わりました。



4月16日（月）、愛媛県中村時広知事、篠原市長、愛媛大学大橋裕一学長のほか、紙関連企業など多数の関係者が出席し、完成記念式典が行われました。



### 学生スペース2【イノベーションセンター2階】

産業イノベーション学科（紙産業コース）3・4年生の居室。落ち着いた雰囲気です。学生が増えても対応できるようゆとりを持たせた設計です。



### ミーティングルーム1【イノベーションセンター1階】

会議室を増やして、研究開発や学生指導の環境も充実しました。ここから、新技術や新製品のアイデアが生まれていきます。



### 講義室2【県紙産業技術センター内（改装）】

愛媛県紙産業技術センター内で借用している教職員の居室跡も改装して大きな講義室になりました。授業はもちろん、高等学校と大学が連携しての課外授業など、住民の交流の場にもなります。



### ミーティングスペース【イノベーションセンター2階】

愛媛大学のスクールカラーであるオレンジとグリーンに彩られた部屋。学部生・大学院生・共同研究者が集いやすい雰囲気です。世代間交流やグループワークに活用されます。



#### しっかりと学んで 地元に貢献したい！

愛媛大学社会共創学部  
産業イノベーション学科  
紙産業コース3年生

石川康平さん

川之江町出身の私は、将来地元で就職し、生まれ育った「紙のまち」を元気にしたいと思い、紙産業コースを選びました。四国中央市と言えば「紙」が思い浮かぶので、学んだことはどんな職業に就いても自分の力になると思っています。地元のためになるために勉強できるし、ここでしか受けられない授業もあるので、一つひとつしっかりと学んでいきたいと思っています。



#### 教育と研究で 「人間力」を鍛える

愛媛大学紙産業イノベーションセンター  
センター長

内村浩美さん

地域の方々の支えがあって今があると、改めて感じています。施設が新しくなるとともに、学生たちの顔ぶれも変わり、心機一転、再スタートという気持ちです。私たちの一番の基本は、学生の「人間力」を鍛えることです。地域と密着し、教育機能と研究機能の両輪を回して、人材の育成と供給、そして研究成果で、地域の活性化に貢献していきたいと思っています。



#### 三位一体となって 活性化につなげたい

公益社団法人  
愛媛県紙パルプ工業会  
会長

服部 正さん

紙産業イノベーションセンターの完成は、紙産業にとっての新たなスタートです。同センターは、企業が相談や研究などで訪れてこそ生かされる施設ですし、我々企業側もしっかりとその目的を理解して、利用する責任があります。今後、同センター、愛媛大学、企業がコラボレーションし、次々と新しい商品・市場・技術を開発していけることを期待しています。